

「海上保安大学校の国際拠点化」に係る海上保安分野の
諸問題に関する国際学会参加助成事業報告書

(1) 欧州地球科学連合(EGU)2013年総会 (川村紀子)

① 期間

自 平成 25 年 4 月 5 日 (金) 至 4 月 13 日 (土) 9 日間

② 開催都市名 (国名) ウィーン(オーストリア)

③ 主催機関名 欧州地球科学学会

④ 概要

本学会はウィーンの東側、ドナウ川の中州にあるオーストリア国際会議にて開催された。ウィーンを中心部から地下鉄で十数分のところに位置している。学会のレジストレーションシートを見せると、市内であれば地下鉄料金が無料になる。また学会からポストカードを送る際には郵便料金が無料になるなど、ウィーン市を挙げて学会を開催していた。

本学会では、約 500 のセッションが開催され、要旨の数は約 13,000 件であり、申請者が所属する学会の中では世界では 3 番目に規模が大きいものである。学会のプログラムは事前に Web 上で公開されている他、会場ではプログラムが入った USB が配られる。また会場では PC とプリンタがいたるところに設置されており、いつでもアクセスできる状態にある。

申請者は「The magnetic environment, and reliability of the signal in sediments」というポスターセッションで「The magnetic environment, and reliability of the signal in sediments」という発表を行った。このようなセッションタイトルは、ヨーロッパが常に先進的な研究を行ってきたことに起因しており、アメリカや日本の学会においてこれまで見られたことは無い。申請者は海洋研究開発機構の研究船「みらい」によって行われたチリ沖調査航海にて採取した底層水および海底堆積物試料中の鉄濃度、種類、粒径の測定を行った。鉄は、海水中にナノオーダー程度の濃度で存在しており、また海洋プランクトンの必須元素かつ制限元素である。よって鉄濃度が海洋プランクトンの増減に強い相関を示すと考えられている。申請者の結果からは、海底では底層水中の鉄濃度と海底堆積物中の鉄化合物の種類が強い相関関係にあることが明らかとなった。つまり底層水中の鉄濃度が高い場所は、還元的環境にあり、このような場所では磁鉄鉱(Fe_3O_4)が分布している。一方、酸化環境では、海底堆積物中には赤鉄鉱(Fe_2O_3)の割合が増えることが判った。底棲プランクトンの量とも相関があることが明らかとなった。発表の際には、スイス工科大学の研究者をはじめドイツ、フランス、イタリアおよび日本の研究者が訪れて、彼らと議論し、研究に関する情報を交換した。論文の作成に目途がついた段階での発表であったことから発表

内容がまとまっており、判り易く明快であるという好評を得た。

また関連するセッションを公聴して、今後の研究に役立つ情報を得た。ヨーロッパでの開催ということで、北はスカンディナヴィア半島諸国、南はイスラエル、東はトルコから多くの研究者が集まった。日本人の参加はほとんどなかった。ヨーロッパという土地と文化を重要視してのことだとは思いますが、非常に良い学会であっただけに、学会側の宣伝不足の感が否めない。独創的でアイデアの光る研究が多く、大変に刺激的であった。

(2) プラズマ物理に関する第 40 回欧州物理学会(EPS) (神吉隆司)

① 期間

自 平成 25 年 6 月 29 日 (土) 至 平成 25 年 7 月 7 日 (日) 9 日間

② 開催都市名 (国名) エスポー (フィンランド)

③ 主催機関名 欧州物理学会

④ 概要

2013 年 7 月 1 日～5 日にアアルト大学オタニエミ・キャンパス (フィンランド・ヘルシンキ郊外の都市エスポー) において、EPS 会議が開催された。同会議は年に一回、欧州の都市で開催されているが、参加者は欧州だけでなく、米国、日本、中国、韓国等からと多様であり、今回は約 500 名であった。プログラムのトピックスは、例年どおり、基礎・天体プラズマ、磁場閉じ込め核融合プラズマ、低温・ダストプラズマ、慣性核融合・ビームプラズマの 4 つのカテゴリーに分けられていた。午前の初めに基調講演が行われた後、パラレルセッションで各分野の招待講演または一般の口頭発表が行われた。午後からは、ポスター・セッションが行われ、その後再び口頭発表のパラレルセッションとなった。

本職は会議2日目、ポスター・セッションIIの磁場閉じ込め核融合プラズマで13時30分から15時30分の2時間にわたってポスター発表を行った。今回発表した論文題目は、「Two-fluid Flowing Equilibrium Configurations of HIST Spherical Torus Plasmas Sustained by Double Pulsing Coaxial Helicity Injection (ダブル・パルス同軸ヘリシティ入射によって維持されたHIST[1]球状トーラス (ST) プラズマの流れのある2磁気流体平衡配位)」であり、本論文は、ダブル・パルス同軸ヘリシティ入射によって維持されたSTプラズマに対して軸対称2次元の流れのある2磁気流体平衡計算コードを開発し、その初期的な数値計算結果について議論を行ったものである[2]。具体的にはプラズマ密度が不均一な場合の2流体モデルによる2次元平衡の定式化を行い、同平衡を数値的に解くコードの開発を行った。2流体平衡方程式は特異摂動問題となり、特異性を取り除く方法として、*nearby-fluids* オーダリングという手法を導入している。HISTの境界形状の近い領域での平衡計算を行った。一般化されたオームの法則からローレンツ力 $(1/\epsilon)\mathbf{u}_i \times \mathbf{B}$ と2流体効果 \mathbf{F}_{2F} がほぼ釣り合っており、1流体MHDの近似が破綻していることが分かった。2流体効果 \mathbf{F}_{2F} の内訳を見ると、イオンの反磁性効果、ホール効果、及び電子の圧力勾配効果が支配的であることが分かった。発表では大変多くの研究者が私のポスターの前を訪れ、興味深くまた熱心に私の

話を聴講、有意義な発表，議論及び意見交換を行うことができた。

[1] M. Nagata, T. Hanao, H. Hirono, T. Hyobu, M. Ishihara, K. Ito, T. Nakayama, K. Matsumoto, Y. Kikuchi, N. Fukumoto and **T. Kanki**, Two-fluid Dynamo Relaxation in the HIST Spherical Torus Plasma, *Proceedings of the 40th European Physical Society Conference on Plasma Physics* (Espoo, Finland, 1-5 July 2013) Europhysics Conference Abstracts Vol. 37D, P5.151.

[2] **T. Kanki** and M. Nagata, Two-fluid Flowing Equilibrium Configurations of HIST Spherical Torus Plasmas Sustained by Double Pulsing Coaxial Helicity Injection, *Proceedings of the 40th European Physical Society Conference on Plasma Physics* (Espoo, Finland, 1-5 July 2013) Europhysics Conference Abstracts Vol. 37D, P2.137.

(3) 第 55 回米国物理学会プラズマ物理分科会年会 (神吉隆司)

① 期間

自 平成 25 年 11 月 10 日 (日) 至 平成 25 年 11 月 17 日 (日) 8 日間

② 開催都市名 (国名) デンバー (米国)

③ 主催機関名 米国物理学会

④ 概要

米国物理学会プラズマ物理分科会は、米国国内最大のプラズマ物理分野の会議で、毎年 1 回 11 月頃を開かれ、今回で 55 回目となるが、米国国内のみならず、日本や欧州などからも多数の参加者のある国際的な会議でもある。今回はデンバーのダウンタウンのシェラトン・デンバー・ダウンタウン・ホテルで開催された。内容は、核融合プラズマ、ビーム物理、プラズマ宇宙物理、強結合プラズマ、低温プラズマ等に関する広範囲の研究テーマに関して発表があった。

本職は、会議 2 日目、輸送、磁場反転配位、スフェロマック、ビーム、ショックのセッションで 9 時 30 分から 12 時 30 分の 3 時間にわたってポスター発表を行った。今回発表した論文題目は、「Properties of Two-fluid Flowing Equilibria Observed in Double-pulsing Coaxial Helicity Injection on HIST (HIST 装置のダブル・パルス同軸ヘリシティ入射において観測される流れのある 2 流体平衡の性質)」であり、本論文は、コンパクトな磁気閉じ込め配位である同軸ヘリシティ入射型球状トーラス (ST) プラズマの流れのある 2 流体平衡計算を実施し、HIST 装置で観測される同平衡の性質について議論を行ったものである [1]。2nd パルス前後の実験結果を模擬するために、2nd パルス後、高トロイダル磁場側のセパラトリクス付近の密度を下げ、イオン温度分布を平坦化するようにした。2nd パルス後、トロイダル・イオン流速は $R=0.2\text{m}$ と 0.35m の間の領域でシアが強化されるが、中心オープン磁束コラム (OFC) 領域では、大きな変化は見られない。一方、ポロイダル・イオン流速は $R=0.15\text{m}$ と 0.28m の間の領域でシアが強化されており、OFC 領域での同流速の上昇が、シアの強化に起因していると考えられる。上記の計算結果は実験結果とよく一致している。電子流速に関しては 2nd パルス前後で大きな変化は見られない。2nd パルス前後での一般化されたオームの法則の各項の変化から OFC 領域での径電場 E_r の変化を調べた。2nd パルス前では 2 流体効果 F_{2F} は OFC 領域で負であるが、2nd パルス後では負から正に変化する。それ以外のローレンツ力の大きな分布の変化は見られないことから、 E_r の変化に F_{2F} が重要な役割をしてい

ることが分かった。 F_{2F} の内訳を見ると、イオンの反磁性効果が支配的であることが分かった。また、「NSTXにおける同軸ヘリシティ入射実験における磁気面の高速閉鎖の物理」というタイトルで発表されていたプリンストン大学プリンストンプラズマ物理研究所の F. Ebrahimi 博士、ウィスコンシン大学マディソン校の C.R. Sovinec 教授、ワシントン大学の R. Raman 博士と同軸ヘリシティ入射による ST の電流立ち上げについて議論を行った。発表では大変多くの研究者が私のポスターの前を訪れ、興味深くまた熱心に私の話を聴講、有意義な発表、議論及び意見交換を行うことができた。

[1] T. Kanki and M. Nagata, Properties of Two-fluid Flowing Equilibria Observed in Double-pulsing Coaxial Helicity Injection on HIST, Bulletin of the American Physical Society (Program of the 54th Annual Meeting of the Division of Plasma Physics, Denver, USA, 11-15 November 2013) **58** (2013), GP8.00065.

(4) ANC2013 (Asia Navigation Conference 2013) (山田多達人)

① 期間

自 平成 25 年 10 月 23 日 (水) 至 平成 25 年 10 月 26 日 (土) 4 日間

② 開催都市名 (国名) 釜山 (韓国)

③ 主催機関名

Korean Institute of Navigation and Port Research (KINPR)

韓国航海港湾学会

④ 概要

【国際会議の概要】

10 月 24 日から 26 日の 3 日間にわたり、日本-中国-韓国ジョイントシンポジウムである Asia Navigation Conference ANC2013 (12 回目) が釜山 (韓国) の韓国海洋水産研修院(Korean Institute of Maritime and Fisheries Technology KIMFT)で開催された。ANC は毎年日本、中国及び韓国の航海学会が持ち回りで開催しているが、今回は韓国航海港湾学会(Korean Institute of Navigation and Port Research KINPR)が主催した。

10 月 24 日 10:50 から、KIMFT の講堂(Granf Ballroom)にて開会式が行われ、韓国航海港湾学会長 Prof. Dong-Sup Lee 氏、KIMFT 院長 Mr. Hyung-Taek Jung 氏、大連海事大学校長 Prof. Zuwen Wnag 氏及び日本航海学会井関会長が挨拶を行った。開会式の後、開会式参加者全員で記念写真撮影が行われた (以下に、写真を付す)。



24 日午後から講演会が始まり、3 会場に別れて 2 日間で 68 編の発表が行われた。内訳は、日本 16 編、韓国 23 編、中国 29 編であった。なお、韓国の発表には韓国で研究を行っていたトルコ人の発表 2 編、また韓国海洋大学で研究員として従事している日本人研究者の発表 1 編を含んでいる。

参加者（山田）の発表は、24 日、第 3 会場のセッション A9 の 3 番目であった。なお、参加者は 25 日の A4 セッションの Chair 及び B6 セッションの Co-Chair を担当した。また、24 日の昼食時、各国 5 名の代表者による運営会議が開催され、参加者は日本航海学会メンバーの一人として同会議に参加すると共に、優秀論文（若手研究者）の選抜委員として論文賞の選考等、本国際会議の運営の一部を担った。

閉会式は 2 日目のすべての講演の終了後、講堂にて行われた。韓国航海港湾学会長、KIMFT 院長の挨拶に引き続き、次回の ANC2014 の開催地である中国福建省廈門の集美大学の SHAO Zhepin 教授が開催についてのプレゼンテーションを行った。閉会式の最後に論文賞の発表があり、1 つの最優秀賞と 2 つの優秀賞が表彰された。

【研究の概要】

題目：レーダ画面上の小型 FRP ボートのエコー・ペイント特性
(Echo Paint Characteristics of the Small FRP Boat on the Radar Screen)

レーダは FRP ボートの様な小物標を探知するための重要なツールであり、レーダを有効に活用するためには、このような小物標のレーダ映像面上の表示特性を把握することが重要である。本研究は、実海域において、全長 9m の小型 FRP ボートを対象として、2 つのアスペクト角 (90°及び 0°) 及びレーダ反射器の搭載・非搭載の状況でのエコー・ペイント (Echo Paint) に着目した定量的な解析を行い、その特性について明らかにした。ここで、エコー・ペイントとは、レーダ画面上に表示される反射波の大きさと形状を表現する用語である。

エコー・ペイントの定性的な特性は、レーダの水平ビーム幅、パルス幅及び画面の分解能で説明される。一方、実海域のレーダ映像は使用するレーダの感度設定等により変化する。このことから、定量的な特性把握を行うため、レーダ映像の方位方向と距離方向の広がりについて、信号強度との関係等から検討・評価した (今回、一般的なレーダ使用環境を考慮して閾値を -70dBm に設定した)。また、形状については、映像の方位方向と距離方向の大きさの比 (アスペクト比) で評価した。なお、画面の分解能は使用するレーダ機器に固有の要素であるので、本研究では検討対象としていない。

小型 FRP ボート (全長 9m) を、レーダから 2 つの異なる距離地点に漂泊さ

せ、ポンツーンに係留した広島商船高等専門学校所属の練習船「ひかり」搭載の X バンドレーダにより反射信号強度を 12 ビットのデジタルデータとして計測した。取得したデータについて、小型 FRP ボートからの反射波エリアをファイル化し、方位方向及び距離方向の映像の広がり計測した。以上のデータを解析した結果、小型ボートのアスペクト角と映像の大きさには相関がないこと、また、レーダリフレクタ搭載時の方がレーダ画面上に映像は大きく表示されること、アスペクト比の解析結果から、レーダリフレクタ搭載時と未搭載時では映像の形状が異なる傾向を示すこと等の解析結果と考察を交え報告した。

【研究の評価】

セッションでの質疑応答等で他の研究者から多数の質問等を受けたことから比較的高い評価を受けた論文であったと推察している。

また、本国際会議では、Chair 及び Co-Chair が複数の評価項目により、論文の内容を 65 点、発表の内容を 35 点として、合計 100 点満点で評価を行い、当該結果を集計し論文賞の選抜の参考としている。優秀論文の選抜は、若手研究者の中から点数を参考に選抜されるので、経験豊富な研究者の論文が優秀論文として選抜されることは無い。しかし、前述の通り参加者は優秀論文の選抜委員であることから、自身の論文を含めて各発表論文の評価点を知る立場であった。具体的な論文の点数や順位を明示することはできないものの、質疑応答等での推測を裏付ける結果であったことを付記する。

最後に「研究の評価」についての記述も求められたことから、上記の通り記述したが、一般論として、当初は見向きもされない研究が、長い時間経過後に高い評価を受ける研究となるものもあることは周知の事実であり、「研究の評価」はその会議の場のみで決まるものではない。「研究の評価」を客観的に記述する事は、論文賞の受賞等のように目に見える結果が伴わないと相当に困難であると考えられる。

(5) 法と社会学会 2013 年度学術大会 (河村有教)

① 旅行期間

自 平成 25 年 5 月 28 日 (火) 至 平成 25 年 6 月 4 日 (火) 8 日間

② 開催都市名 (国名) ボストン・マサチューセッツ (アメリカ合衆国)

③ 主催機関名 法と社会学会 (Law and Society Association)

④ 概要

2012 年 5 月 30 日 (木) から 6 月 2 日 (日) まで、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市のボストンシェラトンホテルにて、法と社会学会 (Law and Society Association) の 2013 年度学術大会が開催された。アメリカ国内はもとより、ヨーロッパ、アジア、アフリカ諸国から多くの研究者が参加した。また、法学者以外にも、社会学、心理学、人類学など、法学以外のバックグラウンドを有する研究者が多数参加した。

本大会においては、6 月 1 日 (土) の午前の第一セッション「法意識、司法参加と正義 (Consciousness, Participation and Justice)」(パネル 3108) で司会・コメンテーター (Chair/Discussant) をつとめ、6 月 1 日 (土) の午後の第三セッション「法と開発 (Law and Development)」(パネル 3438) で報告を行った。

「法と開発」パネルにおいては、マリアナ・プラド (Mariana Mota Prado) 准教授 (トロント大学法学部) が司会・コメンテーター (Chair/Discussant) をつとめ、私の報告を含めて 5 つの研究報告がなされた。5 名によるそれぞれ 15 分の報告の後、マリアナ・プラド准教授からそれぞれの報告に対してコメントがなされ (10 分)、フロアーからの質問を含めて 20 分間のディスカッションが行われた。

I. Arinori KAWAMURA, Japan Coast Guard Academy
Legal Pluralism and “Anthropological Mind”

II. Thierry Kirat, Universite Paris, Dauphine
Legal Tradition, Quality of Institutions, and the State in Africa: Is
Colonization by French Law Countries Distinctive?

III. Mariana Mota Prado, University of Toronto
Institutional Bypass: An Alternative for Development Reform

IV. Tamara Relis, Touro U/London School of Economics
Contextual Realities of Legal Transplantation in Human Rights Cases

V. Toby S Goldbach, Cornell University
Processes of Transplanting Legal Procedures: Normative Options, Legal

Aesthetics and Polymorphism at Court

今回の研究報告の題目は「法多元主義と人類学的思考」であり、本研究報告は、すでに日本語で発表した拙稿「法制度整備支援において何が重要か—インドネシア法執行機関の制度構築支援から考えること」牟田和恵・平沢安政・石田慎一郎編『競合するジャスティス—ローカリティ・伝統・ジェンダー』（大阪大学出版会，2012年）の一部である。日本の警察庁が2002年から開始した「インドネシア国家警察改革支援プログラム」としてジャカルタ首都特別市の東に隣接したブカシ地域をプロジェクト・サイトとして行っている「市民警察活動促進プロジェクト」支援について、2010年10月に実施したJICA長期専門家及びブカシ地域のローカルの警察官らの聞き取り調査をもとに、支援の特徴や問題点・課題について明らかにし、文化相対主義の立場にたちながらエスノセントリズム（自文化中心主義）を戒める人類学的思考が「法と開発」を推進する理念として機能し得るものであると述べた。

視野を広げ多様な・多元的な価値観にふれれば、自ら選択する価値も幅広くなる。同時に文化（価値）相対的になり、自文化（自らの価値）を客観的に眺めることが可能になる。エスノセントリズム（自文化中心主義）への自戒という人類学的思考、すなわち自己を客観的に眺め、自己を相対化し、自己批判する力が養成されてはじめて、現地（ローカル）の人々がどのように考え、何に価値をおいているのか、そのような考え方や価値観を背景にどのような正義を構築していくべきなのかが認識・理解することができる。

文化（価値）相対主義においてどのような価値・原理を擁護すべきかという質問がなされた。人間の存在構造や政治社会の一般的事実の的確な理解に基づいているか否か等々の共通基準に照らして、より適切な結論に向けてさらに立ち入って合理的に議論していかなければならないといえよう。

(6) WEHIA 2013: 18th Annual Workshop on Economic Heterogeneous Interacting Agents (岩永佐織)

① 期間

自 平成 25 年 6 月 17 日 (月) 至 平成 25 年 6 月 24 日 (月) 8 日間

② 開催都市名 (国名) アイスランド (レイキャビク)

③ 主催機関名

ESHIA: Society for Economic Science with Heterogeneous Interacting Agents

④ 概要

ESHIA は、組織設計、政策分析、システムリスクなどへのエージェント指向モデリングの応用を目指している。WEHIA は今回で 18 回目の国際会議であり、2003 年にドイツ・キール、2004 年に日本・京都、などで開催されている。

組織委員は 30 名で約 200 名の参加者があった。4 件の招待講演と 105 件の一般講演及び 14 件のポスターのための論文が採択された。全ての発表論文はオンラインの論文集として発行され、選抜された論文が *Journal of Economic Interaction and Coordination* 誌に掲載される予定である。人口問題、財政危機、社会ネットワークなど経済学、社会学、情報工学などの研究発表を聴講し議論した。今後の研究発展の方向性や新たな着眼点等を見つけることができ有意義であった。

開会の辞はアイスランド大統領 Ólafur Ragnar Grímsson 経済学博士が述べた。本会議での研究発展の期待が伺われる。同国は、2008 年 10 月に債務不履行となったが、同国銀行口座に預けていた EU の預金を税金投入によって守るという法律案を大統領は 2 度にわたって署名せず拒否し人気を集めた。そして、現在アイスランドの経済は EU 平均を上回る成長を見せている。

私は、6 月 21 日の午前のセッション (Social Networks) において、"Collective behavior depends on degrees and first choices" と題して研究発表を行った。共著者は防衛大学校生天目章教授である。集団行動のモデルであるシェリングのモデルを局所的な相互作用に拡張して分析した。社会ネットワークとして、今回はスケールフリーネットワークを用いた。そして、集合行為は、初期の選択状態、意思決定のしきい値の分布関数、試行に影響を受けることを示した。さらに、その試行の影響を詳しく分析し、ハブとなる者の最初の意思決定に大きく影響されていることを示した。質疑では、社会ネットワークの方向性についての質問に回答した。

発表後、鳥取大学の石井教授と会議の合間に議論を行った。そして、石井教授が提案している「ヒット現象の数理モデル」理論に私が扱っている様々な社会ネットワーク構造を導入したいと申し出があった。石井教授の理論は、現代の通信手段による人々への行動への影響を計算する社会物理学の理論である。そして、共同研究をすることになり、そのための科研費等への研究費助成を申請した。これらの研究成果を私が別途に研究している心理モデルを考慮した避難のシミュレーションにフィードバックして、現実的なモデルを提案し、災害時の住民避難のための参考なることを期待する。

(7) IES 2013: The 17th Asia Pacific Symposium of Intelligent and Evolutionary Systems (岩永佐織)

① 期間

自 平成 25 年 11 月 6 日 (水) 至 平成 25 年 11 月 10 日 (月) 5 日間

② 開催都市名 (国名) ソウル (大韓民国)

③ 主催機関名 IES Committee

④ 概要

IES は、環太平洋の様々な国からの知能システムと進化計算の研究分野の研究者を集め、意見を交換し最新の研究を発表し協力的な議論をすることを目指している。IES は今回で 17 回目の国際会議であり、これまで 1997 年にオーストラリア・キャンベラ、1998 年に日本・京都などで開催されている。

組織委員は 13 名で約 60 名の参加者があった。3 件の招待講演と 33 件の一般講演のための論文が採択された (採択率は 80%)。全ての発表論文はオンラインの論文集として発行され、選抜された論文が後に発行される予定である。進化計算、経済学、ニューラルネットワーク、ファジーシステム、最適化、複雑システムなどの研究発表を聴講し議論した。研究を推進する上で、今後の発展の方向性や新たな着眼点等を見つけることができ有意義であった。

私は、11 月 9 日の午後のセッション (Complex Structure and Systems) において、”Collective behavior in Cascade and Schelling model”と題して研究発表を行った。共著者は防衛大学校生天目章教授である。人々の行動が伝染していく様子を集団行動のモデルであるシェリングのモデルとカスケードモデルを局所的な相互作用に特化して比較した。そして、意思決定のタイミングや戦略の方向性などの違いがあっても、同様の結果を得ることを示すことができた。また、シェリングのモデルでは、早い段階で集団の意思決定の結果が分かることを示した。質疑では、社会ネットワークとしてスケールフリーネットワークを選んだ理由や集合行為が確率的になることについての質問に回答し議論した。

また、私は、その後のセッション (Applications) において座長を務めた。5 件の発表について、理解を深め議論を促進することができた。

学会後、会議に参加していた韓国の研究者から今回の発表内容を自分の研究に生かしたいとのメールを受けて、彼の論文を読み研究に対するアドバイスをを行った。

写真は、学会のホームページに掲載された会議のスナップショットの一部である。十数年来親交のある McKay 教授の招待講演を聴講している私 (左) の

後ろ姿が写っている。



(8) IFIP/IEEE IM 2013 (佐藤寧洋)

① 旅行期間

自 平成 25 年 5 月 25 日 (土) 至 平成 25 年 6 月 2 日 (日) 9 日間

② 開催都市名 (国名) ゲント (ベルギー王国)

③ 主催機関名 IFIP/IEEE

④ 概要

2013 年 5 月 27 日から 31 日にゲント (ベルギー) において、IM2013 が開催された。ネットワーク運用技術や制御、管理手法・機能、情報セキュリティ、無線ネットワークなどが主なテーマとなっており、今年は 8 つのミニカンファレンス、15 のテクニカルセッション、4 つのワークショップが併催された。例年、アメリカ、ヨーロッパなどから約 300 名の研究者や技術者が参加している。

5 月 28 日 (火) 午後のセッションにおいて、「A Behavior based Policy Management for Realization of Trustworthiness in Future Network」というタイトルでポスター発表を行った。当該セッションには約 200 名程度の参加があった。本論文では、ユーザセントリック・ネットワークセントリック型双方のルーティング機能とルーティングの基本機能として信頼性の提供を可能とするために Secure and Resilient Virtual Trust Routing (SeRViTR) を提案し、それを実現するための基盤システムアーキテクチャの設計および技術課題について検討している。特に、ユーザの通信挙動に基づいた Trust 情報の設定方法や更新方法を検討している内容になっている。質疑応答では、「Trust 情報の計算方法」、「Trust に基づいたネットワーク資源の割り当て方法」、「Behavior の詳細な定義と具体例」などについての議論を行った。研究内容としては、信頼性情報に基づいて通信フローやネットワーク資源を管理するという点で参加者の多くから良い評価をいただき、有意義な発表、討論を行うことができた。

Akira Wada, Yasuhiro Sato, Xuan Liu, Tianyi Xing, Shingo Ata, Deep Medhi, Dijinag Huan, and Ikuo Oka, "A Behavior based Policy Management for Adaptive Trustworthiness Assignment in Future Network," in Proceedings of IFIP/IEEE IM 2013, pp. 784-787, Ghent, Belgium, May 2013